

—Ⅳ 保育者の動きの一側面（その2）—

研究第8部 松沢孝博

1. はじめに

知恵遅れの幼児グループの保育者である私には、子供の変化しないようすを見て疑問を感じたり、焦りを感じたりすることがある。子供に変わることを期待しつつ、変化させる者としての保育者の動きを知らず知らずのうちにとっている私が、子供達によって、子供達の母親によって、また同僚の保育者達によって変化させられることがある。そして変化させられた私が子供と接する時、子供も変化していくことが見られる。

今ここに一つの手掛りによって、私と子供の関係変化が生まれ、日常保育で私にとっての問題が明きらかになっていった様子を一人の幼児（H・5才男子）に関する事例を通して述べる。

2. 私にとって日常保育の中での一つの問題

今動いている子供を他の場へ誘う状況がある。その時ははっきりした意図が明確にあるわけではないが、どの様な時誘うかを振り返ってみると、

- ④集団全体として動く理由から（食事、掃宅、子供全体が一つの動きの中で遊ぶ時）
- ⑤その子供にとって遊びの発展の手掛りになるであろうと思う時
- ⑥子供との関係維持に困窮している時

以上のことがあげられるが、実際に私が子供を誘ったところで子供は今動いていることをやめて私の誘いに応えることは少ない。そして誘う以前の状態に止まることが多い。子供は繰り返しの状況にいる。なぜならそれ以上子供を引っぱった時の子供の気持ちの乱れや興奮を恐れるからである。

そこで私は、子供が終りを感じてくれれば誘いにも応えやすいと思い、言葉としての終りを誘いの言葉の前に意識的につけて子供の動き、繰り返しの状況を終らせることを先に考えて接することにした。ところが、「〇〇ちゃん終り、みんなと一緒に遊ぼうよ」「〇〇ちゃん終り、お弁当だよ、お部屋に行くよ」といったところでこちらの思うようには動かない。言葉のむなしさだけが残

る。

今まで私は誘いを成立させるために子供の動きを終らせるのに汲々としていたが、子供が自らの動きの終りを体験することについて考えるようになった。例えば、子供は終りという思い入れや終りの感覚⁽¹⁾というものがどのようになされ、またどのように子供の中にとり入れられていくのか、あるいはやはりこれは大人が教えていくものなのかを考えながら保育にあたっていた。

3. Hの事例

A. Hの動きを終らせようと誘っている私に対してのHの応え方の一例

砂の上に積木で絵を書いている。横にはまだ積木がたくさん入った箱が置いてある。Hがそこで遊びはじめてそんなに時間はたっていないかったが、他の保育者が子供を連れて「お弁当にしましょう」と呼びに来た。私は少しばかり様子を見ていたが、「さあ！ 終りにしよう、お弁当だって、お部屋に行こうか」と誘った。Hはそのことに対してよっぽど悔しかったのか、今までの楽しそうな表情を崩し、急に横の積木の箱をひっくり返し、中の積木を四方に投げやってしまった。

B. 母親からの手掛り

ある日保育時間終了前、急用で保育の場から離れたついでに階上から庭での子供達の動きを見ることにした。たまたまHが砂の上に汽車を並べて、自分のまわりをすべらせて黙々と遊んでいた。子供達の帰る時刻は過ぎていたらしい。母親がHを呼びに来た。母親は少し離れた所からHを呼ぶが振り向きもせず遊びに没頭している。母親は説得にかかるかのように一・二歩足をHの方へ向ける。しかしすぐ足を止め、元の位置に戻り暫く遠目にHの様子を見ている。Hは汽車を動かすことによって描かれた自分のまわりの輪を広げてある地点でびたりと止まる。そして中腰に体を起こし描かれた全体を一まわり見まわす、立ち上り、母親の所に駆け寄って抱きつく。母親もHの体に合わせて中腰になりHを迎える、何でもないうちの親子の暖かさの通った光景であったが、

私にとっては一つの光明を与えてくれた感じがしたものである。

私は、終りということ、大人が子供にけじめをつけるためにも教えることであるのではないかとも思い、表面的には優しさを装いながら、かなり言語的、指示的に接したこともあった。しかしその場合ほとんど気持ちよく場面の転換をしたことはなかった。Hの母親の動きは色々なことを感じさせてくれた。それは、母親が場を離れないでHの動きを見ていたことは、見守られていることを感じているかもしれないHと、その後の母親との関係をスムーズにする下地であった。例えばHの帰りの身仕度の順調さは母親も驚くほどであった。また母親がHが自ら動きを終えるのを待っていることは、その後の母親とHの関係からみても、待つという一見消極的な大人の動が子供には大きな意味があるのではないだろうか。待つこと、そこからの“受ける”心構えが良いのかもしれない⁽²⁾。また母親は一度呼んでも自分の所へ来なかったHを叱らずに暖かく迎え、H自身が楽しんだことを一緒に喜んでいる様子は、母親も子供と共通の空間の中で感じ、動くことが出来ることで、単に外側からだけの成長だけでなく、内側からの成長もみることの出来る母親の素晴らしいさを感じる。

C. Hが自らの動きを終えるのを待つことが出来るようになった私に対するHの応え方の一例

左手で私の手を取り、右手に小さな汽車、電車を三つ、四つかかえて砂場に行く。動作で座われというので砂場の縁に腰を下す。するとHはこちらに目もくれず電車を使い、砂の上に書いた線路の上を何度となく往復させ始める。Hがしているように、砂の上に腹道いになって電車の動きを見ていると本当に電車が動いているように見えてくる。ひとしきり動くと、トンネル作りにかかり、作っては気に入らないのかこわす。私が大きなトンネルを作ってみるがすぐこわされてしまう。作ってはこわすということは何度となく繰り返した後、「フー」と溜息をついてトンネルをながめ私の方を見る。そして立ち上り私の手を取りその場を離れる。丁度屋食時になっていたので部屋に入ることを勧める。すると屋食の用意をしている保育者を手伝い始めたのである。

D. 卒園したHが再園した時の様子

卒園したHのクラスのクラス会が行われた。それぞれの子供が、その子供なりに成長している様子がうかがわれ、うれしくもまた頼もしく思えた。Hも例外でなく、入室時、旧交を暖めるかのように抱きついてきた。在園中抱き合った時よりピタッとした感じが大変強く感じたのには驚いた。遊びの様子を見ても、道具がふえ、遊び

の広がりを見せていたり、他の子供との関係も幅がでてきたようにも見えた。

ポツポツ、子供達が母親に連れられ、帰る仕度をはじめた。Hのまわりにいた子供達も、部屋に連れられてきた。しかし、Hはまだ、もくもくと遊んでいる。Hの母親は、他の母親や保育者と話をしている。そのうち、Hが、パイパイといい、手を振りながら私の後を通り、母親の横を通り抜け、着替えの置いてある部屋に行き、母親を呼んでいる。Hは自らの動きを終え部屋に戻ってきた。

4. 繰り返しについて

子供達は同じことを何度も何度も繰り返す。もういい加減に思ってもそんなことおかまいなしに続ける。大人がやめさせようと思ってもやめないばかりか、余計やり続ける。それを無理矢理やめさせようとすると子供の気持ちが乱れ興奮したりする。そして収拾に困まることさえある。

しかし子供達は繰り返すことをするうちに自分の与えられた場を保つことを感じ、それは単に場所とか、物とか、人間につながるのではなく、続けていくうちに繰り返して動ける場の雰囲気、その場の人間の気持ちを感じとり安定感として心の中に形成されていく。大人がみて困った動きでも、子供達は自らのうちに生きていくための力を獲得するように思われる。“繰り返し”という意味のなさそうな、むしろ無駄に思えることが子供達の成長にとって大きな力になるようだ。大人の生活の中にももう一度見直してみる時に、“繰り返し”からくる安定感を見る場面がある。その安定感は、子供がしている繰り返しをいつか卒業へ導き、次への成長を促す。

5. 子供にとって自分の動きの終りについて

子供の動きに大人の指示を加えることによって子供の動きを変えたり、終らせたりして、見た目には今までの動きが終ったように見えても子供の気持ちは前の気持ちを残していることが多い。そうすれば、たとえ誘いに工夫をしたつもりでも子供の気持ちが乱れるのは当然のように思われる。

子供にとって自分の動きの終りとは、大人から指示されて自分の動きが終るのではなく、自分にとって気が済んだという時はじめて終りを体験するのではないか。まして子供の動いているまわりの状況が終りになったから子供が自分の気持ちを終りに向けていく、そして自分の動きを終えるというのはかなりの高等精神作用ではないか。その前の段階に、自ら十分に動いて、疲れるなり飽

きるなり、満足するなりして、自分の気持ちの中から終りを迎える必要がある。

ある時期を過ぎ子供にとって非常に大切なことではないだろうか。保育者として、子供によっても違うその時期をよくとらえ、子供自ら終りの体験を生みだせるよう配慮し、余裕を持って子供の動きを見守る必要を感じたのである。

(本論は第28回日本保育学会発表論文に重複する)

参考文献

1. 藤岡喜愛編 人間を考える I 社会思想社 1973
2. 津守 真 言語にあらわれた行動と行為の基本型
“ゆく” および “うける” についての
考察—保育心理学への序説—
高木貞二編 現代心理学の課題 東大
出版会 1971
3. 津守真編 知恵遅れの幼児の教育
慶応通信 1974